

2020年1月26日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「わたしの肉を食べ、血を飲む」

聖書：ヨハネによる福音書6：22～59

《わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は》という言葉には、ヨハネ福音書のイエスに対する思いが表されている。1章に《初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。…言は肉となった》とある。目に見えないはずの神が人間の体をもって現れたことを強調している。キリストの肉を食べ、血を飲むとは、キリストの「言」を体にしみ込ませよと言うことである。

イエスは道を見失い途方に暮れる人々に歩み寄り、一つの希望を投げかけた。人々はそんなイエスに親しみを覚え、共に歩む。ところが多くのユダヤ人が、イエスにバッシングを始めると、弟子たちはどうしたか。多くの群衆と共につぶやく弟子たちの言葉がある。《実にひどい話だ。誰がこんな話を聞いていられようか》(60節)、《弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。》(66節)。

弟子たちも、そして私たちも、こういうふがいなさ、弱さをどうしようもなく抱えているもの。そんな私たちが、どうやってイエスのもとに留まりうるのか。ヨハネの伝えるイエスは不思議な言葉で教えている。《わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる》(56節)。この時の「食べる」は、ギリシア語の「トローゴー(むしゃむしゃ食べる、肉を食らう)」という原語が使われている。このところはヨハネの「主の晩餐」理解とも言われるところ。「主の晩餐」と言えば、パウロが綴った第一コリントの主の晩餐の言葉を思い出すが、《あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに》と。ここの「食べる」は「エスティオー(食べる、食事をする)」、これはいわばお上品な言葉である。ところが先程のヨハネの「食べる」とは全く正反対な食べ方である。これはこういうふうには受け取ることは出来ないか。「わたしの肉をむさぼり食うたびに、わたしを虐げ、殺したことを思い起こしなさい」と。ヨハネにとって主の晩餐とは、この世に人間の肉体を持ってやって来られたイエスを、その肉をむさぼり食うように虐げ、殺してしまった。そのことを痛みをもって思い起こしなさいと言うヨハネのメッセージではないのか。

いざとなった時、寄り添うべき者に寄り添い得ない。語るべきことを語りえない。思いを貫くことができない。自分を守りたい一心で体制になびき、信念を取り下げてしまう。私たちがあの弟子たちと同じようなふがいなさを抱えている。その弱さを思い起こさせる意味において今朝の御言葉があるように思う。(神谷)